

東京女子医科大学看護学会第 11 回学術集会 シンポジウム
「2025 年問題に向けた私たちの挑戦」

キーワードは「たくましい看護職」

佐藤 紀子（東京女子医科大学看護学部）

曰く、2025 年には人類が経験したことのない超少子高齢社会が到来するという。曰く、2025 年に団塊の世代が後期高齢者になることにより、介護・看護を含む医療費等社会保障費の急増が懸念されているという。このような情報が多くなるにつれ、何となく漠然とした不安が私たちの心に去来する。しかし、このような未来予想の情報も「3・11」に象徴される東日本大震災を予測することはできず、あるいは今の 70 歳は一昔前の 60 歳の身体精神機能だ」という研究成果にも驚かされる。つまり、予測されることだけではなく予測しなかったことが起こるのが世の常ということになる。人類は常にそのようなかけつぷちの状況におかれているのだろう。

そして、歴史や文学作品や祖父母の語りから分かるのは、いつの時代も予測されていない出来事であふれかえっていたということだ。第二次世界大戦前後の日本の近代史においても、日本が参戦したこと、広島と長崎に原爆が投下されたこと、戦争に負けたこと、ポツダム宣言を受諾したことなど、後の世の人がその経過を振り返れば物語が見えてくるが、当事者であった人たちは成り行きを知ることではできなかった。この戦争で、厚生労働省の発表によると、軍人、捕虜、国内の一般人を含めて、日本では 240 万人が戦没者であったとしている。世界全体では 8500 万人が犠牲になったということである。

私事で恐縮だが、私の母方の祖父は商船の厨房長だった。戦争中、日本軍に接收された商船でアリューシャンの沖を航海していた時、米軍の爆撃を受け船もろとも亡くなった。お墓には骨はない。いつも長い船旅に出ていたが、3 人の子供の教育のための費用は祖母に残していた。しかし戦後、国債や預貯金は紙くず同然になり、祖母は経済的・物質的には何もかも失った。このような話は、どこにも家庭にもあるのだと思う。そして祖母はたくましく生きなければならなかった。戦後、日本の復興の象徴であった炭鉱会社の社員寮の寮母として住み込みで働き、3 人の子供を育てた。

このことから分かることは、私たちは今在る、そしてこれから仲間になる看護職同士で、お互いの経験や知恵ややりくりの仕方を分かち合い、日常の中で戦略を駆使してやはりたくましく生きていくことだろう。もちろん看護職は市井のひとつでもあるので、ひととしてもたくましい看護職になること、たくましい看護職を育てること、たくましい看護実践を言語化し共有すること、たくましく笑うこと、たくましく歩み続けること、そうしていると次の知恵がまた生まれてくるのだと思う。そんな楽観的な気持ちも持ちつつ、用意周到に 2025 年を迎えたいと思う。